

「がん理学療法部門から」

2020年8月6日

代表運営幹事 高倉保幸

運営幹事 松村和幸

運営幹事 吉田裕一郎

部員 牧浦大祐

部員 國澤洋介

【若手理学療法士への期待】（宮崎善仁会病院 吉田裕一郎）

がん患者の抱える多面的な問題に対して、私たち理学療法士が果たす役割への社会の期待が高まっています。また、そのニーズは病院だけでなく施設や地域へと広がってきています。このため、これからは一部の理学療法士だけではなく、あらゆる病院・施設などで勤務する理学療法士にとってがん理学療法を学ぶことは重要な要素になっていくと思われます。

がんの領域は比較的新しい分野であることから卒前教育が必ずしも十分に行われておらず、がんの臨床経験が少ない人にとっては、臨床では悩みや戸惑いを感じることも多いかと思われます。

当部門では年に1回の部門研究会に加え、がん理学療法カンファレンス、リンパ浮腫理学療法カンファレンス、緩和理学療法カンファレンスを企画していますので、ぜひ、このような場を学びの機会として捉えていただければと思います。また、がん患者への対応では疾患の特性上、知識や技能の習得だけではなく、心理的問題への対応なども求められるため、医療人として日々の生活の中で自己を研鑽していくことも大切です。

がん理学療法はまだまだ発展途上の分野であり、さらなるエビデンスの構築が求められています。臨床だけに留まらず研究を中心とした学術活動にも積極的に取り組んでいただきたいと思います。研究もしていきたい、しかし実際の研究手法には自信がないという方には、研究サポート事業として当部門のメンバーが研究の指導も行っていますので是非活用して下さい。

一人でも多くの方が、がん理学療法に興味を持っていただき、共に学び、臨床、研究を推進していけるように、当部門を活用していただくことを望みます。

【関連する他領域との共通点と差異】（埼玉医科大学 國澤洋介）

がん理学療法の内容は、脳卒中や運動器疾患で障害を負った方の機能回復を目的とした理学療法と大きな変わりはありません。しかし、対象となる障害は、がんという疾患の直接的な影響によるものに加え、手術療法、放射線療法、化

学療法などのがんの治療過程で生じる間接的影響によるものがあり、これらの有害事象の知識や対処方法、関連職種との連携を含めたリスク管理の重要性ががん理学療法の特徴であると言えます。具体的には栄養障害や骨髄抑制、リンパ浮腫、骨転移、がん悪液質などに対する理解と理学療法の重要性を深めていく必要性があると思います。

がん理学療法はとても幅広く、予防的・回復的・維持的（支持的）・緩和的といったすべての病期に関わることが求められます。それぞれの時期や有害事象の程度に合わせた機能障害やADL、QOLに対する理学療法の重要性を整理していくことも必要です。また、維持的や緩和的といった病期においては、「再発」や「死」への不安を抱える方も少なくありません。このような精神的・心理的問題についての知識や対応方法についても理解を深めていけるような情報提供の場が必要であると思います。

当部門の過去の研究会においては、骨転移やリンパ浮腫、緩和ケア、周術期、在宅支援といったキーワードが挙がっています。このようなテーマを抱え、今後も多くの関連領域および関連職種との連携を図りながら分科学会へと発展していきたいと考えています。

【近年のトピックス】（神戸大学医学部附属病院 牧浦大祐）

日本人における生涯がん罹患率は男性 63%、女性 48%であり、2人に1人ががんにかかる時代です。2016年に新たにがんと診断された患者さんのうち、65歳以上の高齢者は70%を超えており、さらに、約40%は75歳以上の後期高齢者です。

手術療法や化学療法といったがんの治療方法は、臨床試験によって有効性や安全性が検証され、多くの患者さんが受けられる標準治療になります。この臨床試験は、一般的に若年者や併存疾患のない高齢者を対象に行われています。そのため、実際に治療を受ける高齢がん患者さんに、標準治療が安全・有効に適応できるかどうかの検証が近年課題として取り上げられています。

高齢になれば治療の副作用や合併症が起きやすくなることが予想されますが、必ずしも暦年齢は関連せず、むしろADLやIADL、身体機能の方が強く影響することが明らかになっています。これらは理学療法の対象領域であり、がん治療において理学療法が果たす役割は今後ますます重要になります。がん理学療法は、がん患者さんの生活やQOLの維持だけでなく、治療継続のサポートを通して予後の改善にまで結びつく支持治療として、今後の臨床・研究の発展が期待されています。

【今後充実を図りたいこと】（手稲溪仁会病院 松村和幸）

がんの罹患数と死亡数が増加する一方で、生存率が上昇傾向にあることから、がん理学療法の必要性が益々高くなっていると考えられます。これまで、当部門では、全国各地での研究会やカンファレンスを開催することでがん理学療法の普及と発展、地域でのネットワーク構築に取り組んできました。また、講演や口述演題、ポスター発表を行う研究会の開催により学術的発展を図ってきました。しかし、がん理学療法の普及は未だ不十分であり、エビデンス構築など学術的発展を更に進めていく必要もあります。そのため、今後は、コロナ禍で ICT の活用が進んできたことを踏まえ、オンラインなどによりカンファレンスや研究会により多くの方が参加できるような形式を取り入れていくことや、がん理学療法に含まれているリンパ浮腫や緩和ケアなどを領域別に発展させていくこと、また、評価や治療の標準化を図るために多施設間共同研究を視野に入れた取り組みを進めていきたいと考えています。

さらには、当部門が分科学会に移行し、がん理学療法の専門理学療法士の確立や他職種も含めた関連団体とも連携した活動を行なっていければと考えています。今後も、がん理学療法の普及と発展を継続させるために、より多くの皆さんの力を必要としていますので当部門の活動に積極的にご参加下さい。